

第53回全日本中学校国語教育研究協議会

子どもたちが自ら学び、深める授業づくりの実践と改善

丸亀市立東中学校 合田 麻美

1 全体会

① 概要

研究主題の設定理由、これまでの神奈川県の実践について基調提案。平成15年の「プロセス重視の学習指導案」提案以降、神奈川県では継続した研究を行っている。その後、「教師」主体の学習指導案という形ではなく、「生徒」が主役となる「学びのプラン」へと発展していったことの説明を受けた。

② 考察

平成15年から継続した研究を行っていることがうかがえる内容だった。教師がどういう働きかけをするか、どういう活動を行うかというのは、授業改善を行う上でわたしたちも考えることだが、そこから生徒が主役となり、「自ら学ぶ」ために授業全体を改善していったことが分かった。「学びのプラン」「学びの地図」というものを明確にすることで、生徒がその単元で何を学ぶのか、次に何をするのかなど、見通しをもって活動することができるのではないかと感じた。

2 授業

① 概要

第3分科会「書くことA」では、『社会に向けて自分の意見を表明しよう』という学習課題で授業公開が行われた。3年生(9年生)の授業で、各自1台のタブレットを持ち、タブレット上でのまとめ活動と班に向けての現段階の自分の意見発表を行っていた。

② 考察

ICTの活用が普段から行われている

のだろうと感じた。生徒は、教師の指示で「スライド」や「スプレッドシート」、「ドキュメント」など、その活動で必要なものを考え、操作していた。この授業だけでなく、普段から使っているからこそ、短い説明で生徒が考え、使い分けることができていたのだと思う。お互いのスライドを自分の画面上で見ることができ、共有もスムーズに行うことができていた。「ICTは時間がかかる」と言って使わないのではなく、継続して使うことで時間短縮ができ、生徒の活動の幅が広がっていく。継続することの大切さが分かった。また、タブレットのよさとして、教師が生徒の状況をリアルタイムで確認できるということがあると思う。生徒が操作しているファイルを確認し、困っている生徒に声かけをすることができていた。

授業では、新聞に投稿された投書を見て、生徒がゴールイメージをもって活動することができていた。何十もの投書を生徒が画面上で自由に見ることができるようになっており、そこで見た投書が生徒の書き方のモデルとなるようになっていた。教師が多くを説明するのではなく、生徒が自然と学ぶことができるように考えられていた。授業中、何度か全体に向けて教師が話すことはあったが、ほとんどはタイムキーパーの役割で、生徒が中心となって活動していた。

教師自身が単元全体の見通しをもって授業準備することが大切だと感じた。

3 分科会

① 概要

第6分科会「古典」では、生徒が古典に親しみ、自ら学び深め語ることができるように研究してきた授業の成果を聞いた。従来のやり方では、教師が古典の知識を伝え、生徒が学ぶやり方であるが、今後は「読むこと」を通して学習していくことが必要だと考え、授業改善を行った。

② 考察

授業実践を聞いていると、複数の題材を用意して選択制で学ぶ、という手法をとっているものが多かった。生徒が興味をもって学ぶことができるように課題を設定している。資料が増えると大変になるため、準備段階でしぼっていくことも重要になる。発表を聞いていて「なるほど」となったのが、「古典好きの教師が一生懸命古典のよさを話しても生徒にはなかなか伝わりにくい」ということである。生徒自身が「面白い」と思えるような題材、自分の生活と繋がっていて学ぶ必要性を感じられる課題を設定することが大切だということだった。そのために「ビギナーズ・クラシックス」を活用したり、修学旅行などの行事とつなげたりして学ぶことが効果的だと思った。

が、選択制の課題を用意したり、複数の資料から学ぶことができるように資料を準備したりして、生徒が「楽しい」「面白い」と感じて国語の学習ができるようにしていきたい。

4 今後に向けて(R9四国大会)

大会に向けてではなく、継続的に授業改善していくことが大切だと感じた。普段の授業でしてきたことが生徒のできることに繋がっていく。ICTについても、使える場面を考えて取り入れていきたいと感じた。また、神奈川県が使っている「学びのプラン」のような生徒が見通しをもって活動するための補助資料となるようなものを考えて使っていきたいと思う。授業準備は大変になるかもしれない